

六朝時代における『法華經』の研究講説

佐藤 心 岳

一

『法華經』は、諸大乘經典のうちでも最もすぐれた經典の一つに數えられている。この經典が最もすぐれた經典の一つとして、古來、數限りない人びとによつて重視信奉されてきたことは、周知の事實である。ところが、この經典が、中國においては實際に、いつ、いかなる地域に傳えられて、研究され講説されて、人びとの思想信仰を育んだかということになると、歴史的には、はつきりしたことがよくわからない。この種の問題に關する研究は、從來、どういうわけか研究對象の埒外に置かれていて、ほとんど顧みられなかつたというのが實情である。實際問題として、中國における佛教思想の流れをこれまでよりもいつそう明確に理解するためには、われわれはどうしてもこのような問題を検討究明してみなければならぬ。このような視點から、この種の問題を検討究明してみることには、文化史的にも思想的にもきわめて重要な意義が存すると考えられる。したがつて、ここでは諸大乘經典のうちでも、とくに中國において最も重要視された經典の一つである『法華經』を取り上げて、六朝時代におけるこの經典の研究講説の實情について検討を加えてみようとおもう。

二

『法華經』は、中國においては六回翻譯されたと伝えられているが、しかし現存するものは、竺法護譯の『正法華經』十卷（西曆二六五年—三一六年）、鳩摩羅什譯の『妙法蓮華經』八卷（西曆四〇六年）、および闍那崛多・達磨笈多共譯の『添品妙法蓮華經』八卷（西曆六〇一年）の三譯だけである。これらのうちで鳩摩羅什譯が最も著名であることはいままでもない。したがって、ここでは六朝時代のうちでも、とくに鳩摩羅什以後における『法華經』の研究講説の實情について検討を加えてみようとおもう。

ところで、六朝時代においては『法華經』は、中國のどの地域に伝えられて研究され講説されたのであろうか。それは、簡単にいえば、主として長安、彭城、荊州、臨淄、吳興、會稽、建康、廬山、洛陽、潼州、および長城を中心とした地域においてであつたと考えられる。

まず、長安（陝西省）において『法華經』の研究講説に關係のあつた人物としては、僧叡、曇影、道生、道融、慧觀の五人が伝えられている。かれらはみな西曆四〇一年に長安へやつてきた西域の大乗佛教學者鳩摩羅什の弟子となつた人たちばかりである。これらの五人の人物のうちで、僧叡と曇影の二人は、鳩摩羅什の歿後、そのまま長安に留まつて『法華經』の研究講説に従事したが、そのほかの道生と道融と慧觀の三人は長安を去つて、それぞれ宋の都建康や廬山、彭城や荊州においてこの經典の研究講説をおこなつた。

僧叡は、魏郡長樂（河北省冀縣）の人で、十八歳のときに出家して僧賢法師の弟子となつた。かれは二十二歳でひろく經論に通じ、泰山の僧朗法師の『放光般若經』の講説を聞いて師に認められ、二十四歳になると、各地を遊歴

して佛典の講説をおこなつたが、そのときにその講説を聞く人びとは群を成したという。かれはかねて中國にはまだ禪法が傳えられていないことを深く嘆いていたが、後秦弘始三年（四〇一）十二月、鳩摩羅什が長安へやつて來ると、その六日目から禪についての教えを請うた。その結果として翌年の正月には『坐禪三昧經』が譯出された。

その後、僧叡は鳩摩羅什の譯經に参加して『法華經』などを譯出した。このとき鳩摩羅什は、竺法護譯の『法華經』の「天見人、人見天」という譯語をみて、これはあまりにも直譯にすぎるといつたところ、僧叡がそれではそれを「人天交接、兩得相見」と譯したらどうかといつたので、それをそのまま譯語として採用したといわれる。このことばのうちに、僧叡の學識の豊かさの一面がよくうかがわれる。のちにまた『成實論』の翻譯が完成したときに、僧叡は初めてこれを講説したが、その趣意の説明よりはなかなか立派で、それは鳩摩羅什の考えとまつたく同じものであつた。それで鳩摩羅什は僧叡と會つて經論を傳譯するならば、眞に恨むところはないといつて、かれを稱讃したと傳えられている。

僧叡は多くの經序を作製したが、そのなかに「法華經後序」⁽¹⁾がある。かれはこの「法華經後序」の冒頭において『法華經』は「諸佛の祕藏であり、衆經の實體である」と述べているが、このことばは、かれが諸大乘經典のうちでもとくにこの經典を重要視していた事實をよく物語っている。かれは後秦弘始八年（四〇六）に鳩摩羅什によつて『法華經』が譯出されると、ただちにその經典の研究に着手して、かれが亡くなつたと考えられる西曆四二〇年⁽³⁾までの十四年間、長安の佛教界において諸大乘經典とともにこの經典の研究講説をおこなつて、人びとの思想信仰にきわめて大きな影響を與えたと考えられる。

曇影は、その出身地は不明であるが、かれは孤獨を愛し、貧に安んじて、もつぱら學問に志していたという。か

れはよく『正法華經』⁽⁴⁾や『光讚般若經』を講説したが、その講説のたびごとに千數百人の人びとが集まつたと傳えられている。

その後、曇影は關中に入つたが、そこで秦の姚興によつて格別の禮遇を與えられた。鳩摩羅什が長安へやつて來たときには、曇影は早速かれのところへ行つて、かれに師事した。鳩摩羅什は姚興に向かつて曇影のことを「昨日、影公に會つたが、かれはこの國の風流標望の僧である」といつて褒め稱えたと傳えられている。ここに曇影の僧としての人格の一面がよくうかがわれる。曇影は長安の逍遙園において鳩摩羅什の佛典の翻譯の仕事を手付けていたが、その後、後秦の弘始八年(四〇六)に鳩摩羅什によつて『妙法蓮華經』が譯出されると、もともと西晉の竺法護譯の『正法華經』を最も重要視していた曇影は、早速、この鳩摩羅什譯の『妙法蓮華經』の註釋をおこなつて、『法華義疏』四卷を著わした。⁽⁷⁾

ところで、この經典の註釋書はいつごろ著わされたと考えるべきであらうか。曇影はすでに竺法護譯の『正法華經』の研究者であり、しかもこの經典を最も重要視していた人物であつたから、かれが鳩摩羅什によつて新たに譯出された『妙法蓮華經』に對して人並み以上の關心をもつていたことはいうまでもない。したがつて、このように『法華經』にきわめて深い關心をもつていた曇影が、鳩摩羅什がこの經典を譯出した直後に、この經典の註釋書を著わしたと考へてもなら差し支えないであらう。

三

鳩摩羅什の歿後、僧叡や曇影が長安に留まつて『法華經』を研究講説したのに對して、長安を去つて、宋の都建

康や廬山においてこの經典を研究講説した人としては、道生が擧げられる。道生は、俗姓を魏氏といい、彭城（江蘇省銅山縣）の人で、竺法汰について佛教を學び、のちみずから竺を姓とした。十五歳のときに講座に上り、二十歳のころには、その名は天下に聞こえていたといわれる。最初、建康（南京）の龍光寺に住し、ついで東晉の隆安年中（三九七—四〇一）に廬山に入り、そこに七年間幽棲した。かれは佛教の本質を究めることを最も重要視して、ひろく經論を求めて佛教の研鑽に努めた。當時、鳩摩羅什が長安において經論の翻譯に努めていたが、そのことを知つた道生は、慧叡、慧嚴、および慧觀らとともに長安へ行つて鳩摩羅什について佛教を學んだ。そうしてかれは鳩摩羅什門下の四傑の一人に數えられるほど有名になつたが、鳩摩羅什が亡くなると、東晉の義熙三年（四〇七—後秦弘始九年）に建康へ歸つて青園寺に止まり、そこで佛典の研究講説に従事した。かれは宋の武帝に深く重んじられ、王弘、范泰、顏延之らもまたかれに道を尋ねたといわれる。その後、道生は法顯譯の六卷泥洹經を讀んで、闡提成佛説や頓悟説などの新學説を唱えたために、舊説を墨守する保守的な學徒の譏忿に觸れ、ついに建康佛教界の擯斥を受けて、宋の元嘉七年（四三〇）にふたたび廬山に入つた。そうしてかれは元嘉十一年（四三四）十月に廬山の精舎において法席に端坐して歿した。

道生は、かつて後秦の弘始八年（四〇六）に長安において鳩摩羅什の指導のもとに『法華經』が翻譯されたときに、その譯場に列席した。そうしてかれは『法華經』の註釋書を著わしたが、その註釋書は世の人びとにひじょうに尊重されたと傳えられている。⁽⁸⁾

ところで、この註釋書はいつごろどこで著わされたと考えるべきであらうか。道生は、西曆四〇七年に長安を去つて南へ歸つたから、かれが長安においてこの經典の註釋書を著わしたとは考えられない。したがつて、かれは長

安においては鳩摩羅什の指導のもとに『法華經』の研究をおこなったが、かれはそこではただその研究に参加しただけであつて、西曆四〇七年に長安を去つたのちに、ゆつくりとそのときの研究成果に基づいてその註釋書を著わしたと考えなければならない。

道生は、東晉の義熙三年（四〇七）に長安から建康へ歸つて、二十數年間そこで生存していたが、その間にかれは『法華經』の研究講説をおこなつて、建康佛教界の人びとの思想信仰に測り知れない影響を與えたと考えられる。またかれは晩年の約三年間廬山に滞在したが、そこでも、かれによる『法華經』の思想的影響はかなり強かつたものと考えられる。

また鳩摩羅什の歿後、長安を去つて、彭城においてこの經典を研究講説した人としては、道融が傳えられている。道融は、汲郡林慮（河南省汲縣）の人で、十二歳で出家して最初に外學を學び、『論語』を暗誦して人びとを驚かしたという。かれは三十歳になつて才解英絶し、内外の經書を究めたが、西域の佛教學者鳩摩羅什が長安に滞在していることを聞いて、そこへ行つてかれに教えを請うた。かれは姚興の命によつて逍遙園に入つて、鳩摩羅什の佛典の翻譯事業に参加した。そのとき、かれはまず鳩摩羅什に『菩薩戒本』の譯出を懇請し、またみずから新たに譯出された『中論』や『法華經』などを講説した。

その後、道融は彭城（江蘇省銅山縣）へ歸つて、もつぱら佛典の講説に従事したが、道を問う者は千有餘人、門徒は三百人に及んだという。こうしてかれは多數の佛典を研究し講説して、それぞれの佛典の註釋書を著わした。そうしてこれらの註釋書はいずれも世におこなわれたと傳えられているが、そのなかに『法華經』の註釋書があつた。ところで、この註釋書はいつごろどこで書かれたのであろうか。道融は七十四歳で歿したと傳えられ、鳩摩羅

什が長安へやつてきた西暦四〇一年には三十歳であつたといわれているから、かれは西暦三七一年から四四五年まで生存していたことになる。そうして、もしもかれが鳩摩羅什の歿後、すなわち西暦四〇九年以後ただちに彭城へ歸つて、佛典の研究講説に従事したとするならば、かれは西暦四〇九年から四四五年にいたるまでの三十六年間で佛典の研究講説に従事していたことになる。

その後、彭城すなわち徐州（江蘇省銅山縣）には、また『法華經』の研究者として道登という人物が現われた。道登は、俗姓を芮といい、東莞（山東省莒縣）の人で、徐州の僧衆について『涅槃』『勝鬘』などの諸大乘經典とともに『法華經』の研究をおこなつた。⁽¹¹⁾その後、かれは同じく徐州において僧淵について『成實論』を學んだといわれるが、かれはけつきよく諸大乘經典のうちでもとくに『涅槃經』と『法華經』に精通していたと考えられる。それは「道登は『涅槃』『法華』を善くし、並に魏主元宏（北魏の孝文帝四七一—四九九在位）に重んじられ、名を魏國に馳す⁽¹²⁾」ということばによつて確かめられる。

道登は五十歳まで徐州に滞在していたが、そのころ、その名聲はすでに北魏の都洛陽はもちろんのこと、北魏全土に響き渡つていたといわれる。⁽¹³⁾その後、かれは北魏の都洛陽に招かれて、君臣僧尼に崇敬されて、そこでもつぱら佛典の講説に従事した。そうして、かれは晩年には恒州（山西省大同縣）へ行き、北魏の景明年間（五〇〇—五〇三）に恒州の報德寺において八十五歳で歿した。

このように道登は、徐州の佛敎界において諸大乘經典とともに『法華經』の研究に従事したことが明らかであるが、それは、はたしていつごろのことであつたのであろうか。かれは五十歳のころまで徐州に滞在していたことが明らかであり、そうしてかれは北魏の景明年間（五〇〇—五〇三）に八十五歳で歿したと伝えられているから、かれが五

十歳のときはちようど西暦四六六年から四六九年にかけての時期に相當する。したがつて、道登が江蘇省の西北部に位する徐州において『法華經』の研究に従事していたのは西暦四六六年から四六九年にかけての時期以前のことであつたことになる。そうしてその後、かれは洛陽へ出て、佛典の講説を盛んにおこなつた。かれがそこで『法華經』の講説をおこなつたということは文獻には言及されていないが、しかしとくに「道登は『涅槃』『法華』を善くした」と傳えられているほどであるから、かれが洛陽においてこの經典を講説したことは疑いがないと思われる。またかれは晩年に恒州へ行つたが、そこでもおそらく諸大乘經典とともに『法華經』の研究講説に従事したことであろう。

さらにまた鳩摩羅什の歿後、長安を去つて、荊州において『法華經』を研究講説した人としては、慧觀が擧げられる。慧觀は、俗姓を崔といい、清河（河北省清河縣）の人で、二十歳で出家して師を求めて各地を遊歴したが、のち廬山へ行つて慧遠に師事した。西暦四〇一年に鳩摩羅什が長安へやつて來たときに、そのことを聞いた慧觀は、早速、長安へ行つて、かれの弟子となつて教えを受けた。三千人以上を數えたといわれる鳩摩羅什の弟子たちのうちで、現在、その名を知られている弟子は三十人以上あるが、慧觀はそのなかでも最もすぐれた弟子の一人として知られている。それは、當時の人がすでに慧觀のことを「情を通ずるのはすなわち道生と道融が上首であるが、難を精しくするのはすなわち慧觀と僧肇が第一である」と評していたことによつても知られる。

このようにすぐれた佛教學者であつた慧觀は「法華宗要序」⁽¹⁴⁾を著わして、それを鳩摩羅什に見せたが、そのときに、鳩摩羅什はかれに「あなたの論述はなかなか明快である。そこで南へ行つて、これを弘通することに努めたらどうですか」といつてすすめたといわれる。それで鳩摩羅什の歿後、慧觀は長安を去つて南の荊州（湖北省江陵縣）

へ行つた。そうしてそこで、かれは州將司馬休之にひじように重んじられたという。かれはそこに高悝寺を立て、その地方の人びとを大いに教化したが、かれによつて教化された者は「十のうちその半ばであつた」と傳えられている。このように荊州を中心とした地方の人びとが、「法華宗要序」を著わしたほどの佛教學者慧觀によつて教化されたのであるから、この地方の人びとの多くが『法華經』の思想的影響を受けたことは疑いない。

鳩摩羅什譯の『法華經』の思想的影響が慧觀によつて荊州地方の人びとに及んだのは、鳩摩羅什の歿後、すなわち西曆四〇九年以後のことであつたと考えられるが、この荊州地方は、この經典が譯出されたのちに、その思想的影響が直接に最も早く及んだところとしてとくに注目しなければならない。

慧觀はまた荊州に滞在したのちに、建康の道場寺に止まつて佛典の研究講説に従事していたから、かれはここでも『法華經』の研究講説をおこなつて、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

その後、同じく荊州において『法華經』を講説した人としては、僧慧が傳えられている。僧慧は俗姓を皇甫といひ、もともと安定朝那(甘肅省平涼縣)の人で、先祖は戰亂を避けて襄陽(湖北省襄陽縣)に移住し、代々冠族であつた。かれは少くして出家し、荊州(湖北省江陵縣)の竹林寺に止まつて、曇順に師事した。かれは二十五歳になつて『涅槃』『十住』『淨名』などの諸大乘經典や『雜心論』などとともに『法華經』の講説をよくおこなつた。かれはまた『老莊』を善くし、高士南陽(河南省南陽縣)の宗炳や劉虬らと親しく交わつた。宗炳は「西夏の法輪(中國西部の佛教)絶えざる者、それ慧公に在るか」といつて僧慧を讃歎したといわれる。

劉虬は熱烈な佛教信者であつて、『法華經』を註釋して、みづから佛典の講説をおこなつたと傳えられている。これは、諸大乘經典のうちでもとくに『法華經』が、いかに當時の一般の人びとによつて尊重されていたかという

事實の一端を示すものとして注目しなければならない。

また吳國（江蘇省）の張暢は中國の西部を遊歴して、僧慧に會つて交わりを請うたといわれる。僧慧は齊の初め（四七九）勅命によつて荊州の僧主となり、齊の永明四年（四八六）に七十九歳で歿した。

僧慧はその生涯の大部分を荊州で過ごしたが、そこで諸大乘經典とともに『法華經』の講説に従事したのは、かれが二十五歳になつてからであつた。かれが二十五歳のときはちょうど西曆四三二年に相當する。かれは晩年になつて身體が衰えても、常に輿に乗つて講席におもむいていたと傳えられているから、かれは齊の永明四年（四八六）に荊州において歿するまで諸大乘經典とともに『法華經』を講説していたと考えられる。したがつて、かれは二十五歳から七十九歳で歿するまで、すなわち西曆四三二年から四八九年までの五十四年間の長期にわたつて、『法華經』の講説をおこなつて、荊州地方の人びとにこの經典の思想的影響を與えたことは疑いない。

またこの時代に北シナの臨淄において『法華經』を研究講説した人としては、慧亮が擧げられる。慧亮は、俗姓を姜といい、東阿（山東省東阿縣）の靖公の弟子となつたが、當時の人びとは靖公を大師と呼び、慧亮を小師と呼んだという。のち慧亮は臨淄（山東省臨淄縣）に佛寺を建立して、そこで『大品』『小品』『十地』などの諸大乘經典とともに『法華經』を講説した。⁽¹⁸⁾この講説には各地から學徒が雲聚したと傳えられている。

そののち、慧亮は揚子江を渡つて南へ行つて、何園寺に止まつた。宋の泰始の初め（四六五）には、かれは莊嚴寺の大集會において義士を簡閲したが、このときにここに集まつた僧は千人に及んだという。そうしてかれはこの寺の法主となり、宋の元徽年間（四七三—四七七）に六十三歳で歿した。

ところで、慧亮が山東省の臨淄において『法華經』を講説したのはいつたいつごろのことであつたのであろう

か。慧亮は宋の泰始の初め(四六五)に揚子江を渡つて南へ行つていたことが明らかであるから、かれが山東省の臨淄において『法華經』を講説したのは少なくとも西暦四六五年以前であつたことになる。しかしながら、西暦四六五年には、慧亮はすでに揚子江を渡つて南へやつて來ていたのであつて、かれが實際にここへやつて來たのはこれよりも以前のことであつた。したがつて、慧亮が實際に山東省の臨淄において『法華經』を講説した時期は、西暦四五〇年、すなわち五世紀の半ばごろであつたと考へて大過ないであらうとおもう。

宋代の吳興において『法華經』の研究講説に關係のあつた人としては、曇詒と法瑤が傳へられている。曇詒は、俗姓を康といい、先祖は康居國の人で、後漢の靈帝のときに中國へやつて來て、獻帝の末に戰亂に會つて吳興(浙江省吳興縣)へ移つた。そうしてかれの父は冀州の別駕であつた。かれは十歳で出家して、父とともに各地を遊歴して、鳩摩羅什の弟子の僧習に會つたりしたが、晩年には吳(江蘇省吳縣)の虎丘山に入つて、『禮』『易』『春秋』および『大品』『維摩』などの諸大乘經典とともに『法華經』の講説をおこなつた。⁽¹⁹⁾のち、かれは吳興へ歸り、故章の崑崙山に入つて、そこで二十餘年を過ごし、宋の元嘉の末年(四五三)に六十餘歳で歿したと傳へられている。

このように曇詒は、晩年に江蘇省吳縣の近くの虎丘山に入つて、そこで『法華經』を講説したことが知られるが、しかしかれによるこの經典の講説は、そののち、かれが吳興へ歸つて、故章の崑崙山に入つてからもおこなわれたにちがいない。したがつて、曇詒によるこの經典の講説は、少なくともかれが亡くなつた西暦五世紀の半ばごろまでは、江蘇省の南端に位する吳の虎丘山および浙江省の北端に位する吳興を中心とした地域においておこなわれたと考へられる。

法瑤は、俗姓を楊といい、河東(山西省永濟縣)の人で、宋の元嘉年間(四二四―四五三)に揚子江を渡つて吳興(浙

江省吳興縣）へ行き、そこで沈演之に重んじられて武康（浙江省武康縣）の小山寺に住した。かれは元嘉年間にこの小山寺において『涅槃』『大品』『勝鬘』などの諸大乘經典とともに『法華經』の研究講説をおこなった。かれは小山寺において毎年開講したが、かれの講説を聞くために多數の學者が、三吳一帯から集まつてきたと傳えられている。そうしてそこでかれは諸大乘經典の註釋書とともに『法華經』の註釋書を著わした。⁽²⁰⁾かれは宋の元徽年間（四七三—四七七）に七十六歳で歿した。

ところで、法瑤が吳興の武康の小山寺において『法華經』の研究講説をおこなったのは、いつたいつごろのことであつたのであろうか。『高僧傳』卷七の法瑤傳の記述によると、法瑤は、吳興の武康の小山寺に十九年間滞在して佛典の研究講説に従事していたことが知られる。そうしてかれが勅命によつて首都建康に出るために吳興の武康の小山寺を去つたのは、宋の大明六年（四六二）であつたから、かれが小山寺に住して佛典の講説を始めた最初の年は、これよりも十九年前の西曆四四四年であつたことになる。したがつて、かれが吳興の武康の小山寺において『法華經』の研究講説をおこなつて、そこでその註釋書を著わしたのは、西曆四四四年から四六二年にいたるまでの十九年間のうちのいずれかの時期であつたということになる。

法瑤と同じ時代に豫州（河南省）に道愍という沙門がいたが、かれもまた『維摩經』などとともに『法華經』を善くしたと傳えられている。⁽²²⁾したがつて、かれによつて河南省地方に『法華經』の思想的影響が及んでいたことは疑いないが、それは西曆第五世紀の後半のころであつたと考えられる。

宋代の會稽において『法華經』の研究講説に關係のあつた人としては、曇機が傳えられている。曇機は、俗姓を趙氏といい、長安（陝西省）の人である。かれは關中で戰亂に遭つたときに、その土地を避けて、東に下つて會稽

(浙江省紹興縣)へ行つた。かれは『毘曇』などとともに『法華經』を善くしたが、すでに名聲を馳せていた超進⁽²³⁾とともに當時の人びとからひじょうに尊敬されていた。そうしてかれは郡守鄧瑯王琨の懇請によつて會稽の嘉祥寺に住して、『法華經』を善くしたと傳⁽²⁴⁾えられている。かれは年齢も歿年も不明であるが、超進と同じ時代の人であつたと考えられるから、かれはほぼ宋代に生存していたことになる。そうしてかれが會稽の嘉祥寺において『法華經』を講説して、この地方の人びとにその思想的影響を與えたのは、だいたい宋代の半ばごろ、すなわち西暦四五〇年ごろであつたと考えられる。

四

宋の首都建康において『法華經』の研究講説に關係のあつた人物としては、僧含、求那跋摩、僧鏡、曇度、慧基が傳えられている。まず、僧含は、その出身地は明らかでないが、かれは幼少のころから學問を好み、成長して佛教に精通し、なかでも『大涅槃經』を善くし、常にこの經典を講説していたという。宋の元嘉七年(四三〇)に新興の太守陶仲祖は建康の北の鍾山に靈味寺を建立したが、僧含はこの寺に招かれてそこに住した。のち、かれは歷陽(安徽省和縣)へ行つて、そこで佛教の弘通に努めた。當時、任城の彭承は『無三世論』を著わしたが、僧含は、これに對抗して『神不滅論』を著わした。また僧含は、『聖智圓鑒論』『無生論』『法身論』『業報論』などとともに『法華宗論』を著わした。⁽²⁶⁾その後しばらくして、かれは九江(江西省九江縣)におもむき、そこで大いに佛教の弘宣に努めた。かれは『法華宗論』を書いたほどの人物であるから、かれが佛典の講説に際して、『法華經』の思想信仰を高揚したことはいうまでもない。

僧含が『法華經』を講説して、その思想信仰を高揚したのは、かれが遊歴した地域、すなわち建康、歷陽、九江を中心とした地域においてであつたと考えられる。そうして、僧含によつて『法華經』の研究講説がおこなわれて、これらの地域の人びとにその思想的影響が及んだのは、鍾山に靈味寺が建立されて僧含がそこに住した西暦四三〇年以後のことである。

求那跋摩は、罽賓國の人で、もともと王族の出身で、十五歳で出家して、ついで具足戒を受けた。のち、かれは商人竺難提の船に乗つて廣州へやつて来て、宋の文帝の招きによつて元嘉八年（四三二）正月に首都建康に入つた。文帝はみずからかれを引見して勞問し、勅してかれを祇洹寺に住せしめた。王公貴族もまたかれに對して心から敬意を表した。かれは祇洹寺において『十地』などの諸大乘經典とともに『法華經』を講説したが、その講席はなほだ盛大であつた⁽²⁷⁾と伝えられている。このように求那跋摩は佛典の講説に従事するとともに、『菩薩善戒經』や『四分比丘尼羯磨法』などの翻譯に従事した。かれはその年の夏に鍾山の定林下寺において安居し、それを終えて祇洹寺へ歸つたが、九月二十八日に六十五歳で歿した。

求那跋摩は、宋の都建康へやつて来て、そこで九ヶ月足らずの期間を過ごしたにすぎなかつたが、この間にかれが諸大乘經典のうちでもとくに『法華經』を選んで講説したということは注目すべきことである。ともかく、かれが西暦四三一年に首都建康の祇洹寺において『法華經』を講説して、人びとの思想信仰に大きな影響を與えたことは疑いない。

僧鏡は、もともと隴西（甘肅省）の人で、のち吳（江蘇省）に移住し、出家して吳縣の華山に住した。かれはのちに關隴（陝西甘肅兩省）に入つて、師を尋ねて法を受け、何年か經つて故郷へ歸つた。のちかれは都の建康に止まつて、

大いに佛典を講説したが、司空東海の徐湛之はかれの風素を重んじて、かれを一門の師となした。そののち、かれは姑蘇（江蘇省吳縣）へ歸つて、また上虞（浙江省上虞縣）の徐山へ行つたが、そのときにかれに跟いて行つた學徒は百有餘人にも及んだという。

このようにして、僧鏡は三吳一帯の人びとを教化したのであるが、その名聲は遠く都にまで響き渡つていたといわれる。その後、かれは宋の孝武帝の命によつて都へ出て、鍾山の定林下寺に止まつた。かれはここではもつぱら佛典の研究講説に従事して、『維摩』『泥洹』などの諸大乘經典とともに『法華經』の註釋書を著わし、また『毘曇玄論』などを著わした。⁽²⁶⁾ そうしてかれは宋の元徽年間（四七三—四七七）に六十七歳で歿した。

ところで、僧鏡が鍾山の定林下寺に止まつて、佛典を研究講説して、諸大乘經典とともに『法華經』の註釋書を著わしたのは、いつたいいつごろのことであつたのであらうか。僧鏡は、すでに述べたように、孝武帝（四五四—四六四在位）の命によつて都へ出て鍾山の定林下寺に止まつたことが明らかであるから、かれが定林下寺において佛典の研究講説を開始したのは、少なくとも西曆四五四年以後のことである。したがつて、かれによつて『法華經』の註釋書が著わされたのは、孝武帝が即位した西曆四五四年から、かれが亡くなつたと伝えられている元徽年間（四七三—四七七）にいたるまでの約二十年間におけるいずれかの時期であつたということになる。しかしながら、鍾山の定林下寺におけるかれの『法華經』の註釋は、この二十年間のうちのかなり早い時期におこなわれたにちがいない。僧鏡が鍾山の定林下寺において『法華經』の註釋書を著わした時期は、おそらく西曆四六〇年代、すなわちかれが五十二—六十一歳位のころであつたと考えて差し支えないであらう。

曇度は、俗姓を蔡といい、江陵（湖北省江陵縣）の人である。かれは、はじめ宋の都建康に遊學して、そこで『涅槃

槃『維摩』『大品』などの諸大乘經典とともに『法華經』を研究して、その深淵にして微妙な意義を探究した。のち、かれは徐州へ行つて、僧淵法師について『成實論』を學んだが、これに關する深淵な知識をもっているという點では、當時かれの右に出る者はいなかつたといわれる。北魏の孝文帝(四七一—四九九在位)は曇度の名聲を聞いて使いを遣わしてかれを招請したが、そのとき、かれはすでに北魏の都平城(山西省大同縣)にやつてきて、大いに佛典の講説をおこなつていた。そこで孝文帝は早速みずから曇度の講席に列席してそのすぐれた講説に耳を傾けた。このようにして、曇度は北魏の都平城において佛典の講説をつづけたが、中國各地から集まつてきた學徒は千人以上にも及んだといわれる。そして、かれは北魏の太和十三年(四八九)に歿したと傳えられている。

ところで、曇度が宋の都建康において『法華經』の研究をおこなつたのはいつごろであつたのであろうか。かれが宋の都建康から徐州を経て北魏の都平城へ移つたのは北魏の孝文帝の在位中である。もしもかれが孝文帝が即位した西曆四七一年か、またはその後まもないころに平城を訪れたとするならば、かれが建康において『法華經』の研究をおこなつていたのは西曆四七一年ごろまでであつたということになる。しかしながら、かれは實際には平城を訪れる以前に徐州に滞在していたから、かれが建康に在住して諸大乘經典とともに『法華經』を研究していたのは、少なくとも西曆四七一年よりももう少し以前のことであつたと考えなければならぬ。それで、それは西曆四五〇年代のことであつたと考へて大過ないであらう。

ところで、曇度は北魏の都平城には實際にどのくらい在住していたのであろうか。かりに曇度が孝文帝が即位した西曆四七一年に平城を訪れたとするならば、かれが歿したのは西曆四八九年であつたから、かれが平城に在住したのは約十八年間であつたということになる。したがつて、かれはこの十八年間に平城において佛典の講説を盛ん

におこなつたということになる。そうして、かれがどのような種類の佛典を講説したかということとは不明であるが、しかしかれはかつて宋の都建康において諸大乘經典とともに『法華經』を研究した人物であるから、ここでもかれがこの經典を講説したことは間違いないと考えられる。

慧基は俗姓を呂といい、吳國錢塘（浙江省杭縣）の人で、幼にして建康の祇洹寺の慧義法師に依り、十五歳で出家して佛典の研鑽に努めた。のち西域の法師僧伽跋摩が中國へやつて來たときに、慧基はかれの師慧義の命によつて僧伽跋摩に供事した。かれは二十歳のときに蔡州（河南省新蔡縣）へ行つて戒を受けたといわれる。當時、宋の都建康へやつてきた僧伽跋摩は、かれに向かつて「汝はまさに道、江東（江蘇省地方）に王たるべし。すべからく久しく京邑に留まるべからず」と言つたので、かれは四、五年の間各地を遊歴して、つぶさに衆師を訪ねて、『小品』『思益』『維摩』『金剛波若』『勝鬘』などの諸經典とともに『法華經』の研究に没頭した。⁽³⁰⁾その後、かれは宋の都建康においてかれの師慧義と一緒に過ごしていたが、元嘉二十一年（四四四）に師が亡くなつたので、東へ歸つて錢塘の顯明寺に止まり、ついで會稽へ行つて、山陰の法華寺に止まつた。そうして、ここに多くの學徒が道を問うて集まつてくるので、慧基はまた三吳一帯を遍歴して、佛典の講説をおこなつた。その講席にやつてくる學徒は千人以上に及んだという。宋の太宗（四六五―四七二在位）は使いを遣わして慧基を招請したが、かれは病氣と稱して行かなかつた。かれは元徽年間（四七三―四七七）にふたたび招請されて、初めて浙水を渡つたが、また病氣になつて引き返して、會邑の龜山に寶林精舍を建てて、そこで過ごした。當時の有名な文學者、周顒、劉楨、張融らはみな慧基の教えを受けた。また慧基は司徒文宣王から「法華」の宗旨について書簡をもつて尋ねられたが、かれはそれに答えて『法華經』の註釋書を著わした。⁽³¹⁾かれはすでに名聲を天下に馳せ、勅命によつて僧正となつていたが、齊の建

武三年（四九六）十一月に城傍寺において八十五歳で歿した。

ところで、慧基が諸大乘經典とともに『法華經』の研究に従事したのはいつごろのことであつたのであろうか。かれは二十歳で戒を受けたのちに、僧伽跋摩から江東へ行つて法を説くように勧められ、それでかれは四、五年の間各地を遊歴して、諸大乘經典とともに『法華經』の研究に従事したと伝えられている。かれは齊の建武三年（四九六）に八十五歳で亡くなつたから、かれが二十歳のときはちょうど宋の元嘉九年、すなわち西暦四三二年に相當する。そうしてその後四、五年の間、かれは各地を遊歴して、諸大乘經典とともに『法華經』の研究に従事したのであるから、かれがこの經典の研究に従事したのは西暦四三二年から四三七年までの間においてであつたと考えられる。

その後、西暦四四四年に慧基は宋の都健康から東へ歸つて、錢塘の顯明寺に止まり、しばらくして會稽へ行つて、山陰の法華寺に止まり、三吳（江蘇省の南部および浙江省の北部）を遍歴して佛典の研究講説をおこなつたから、とくに『法華經』に深い關心をもつていたかれが、西暦四九六年に八十五歳で歿するまで、これらの地域の人びとにこの經典の思想的影響を與えたことは疑いのない事實であると考えられる。また、かれの『法華經』に對する造詣の深さは、かれが司徒文宣王の要請に應じて『法華經』の註釋書を著わしたことによつても明らかである。

五

宋・齊の首都健康において『法華經』の研究講説に従事した人としては、弘充と僧印が擧げられる。弘充は涼州（甘肅省武威縣）の人で、幼少のころから志力があり、『老莊』に精通するとともに佛典をよく理解していた。宋の

大明の末年（四六四）にかれは揚子江を渡つて建康へ行き、はじめ多寶寺に止まつた。かれははじめのころ人をよく論難攻撃していたが、のちにはそのように人を非難するようなことはなく、もつぱら『法華經』や『十地經』の講説に従事していた。そうしてかれの講説を聴く者は堂に滿ち溢れたといわれる。⁽³²⁾ 弘充は宋の太宰江夏王義恭によつてひじように重んじられた。また明帝は即位して湘宮寺を建てたが、そのときに、かれは招かれてその寺の綱領として住した。かれは齊の永明年間（四八三―四九三）に七十二歳で歿した。

ところで、弘充が宋の首都建康において『法華經』を講説したのはいつごろであつたと考えるべきであらうか。かれが揚子江を渡つて建康へやつて來たのは宋の大明の末年（四六四）であつたから、かれがそこで『法華經』を講説したのは西曆四六四年以後のことである。そうしてかれは齊の永明年中（四八三―四九三）に歿したと伝えられているから、かれがかりに永明五年（四八七）に歿したとするならば、かれはほぼ二十三年間首都建康に在住していたことになる。したがつて、かれがそこで『法華經』を講説したのはこの二十三年間のうちのいずれかの時期であつたと考えなければならない。

僧印は、俗姓を朱といい、壽春（安徽省壽縣）の人で、初め彭城（江蘇省銅山縣）へ行つて、曇度について『三論』を學んだ。かれはのちに廬山（江西省九江縣南）へ行つて、慧龍について『法華經』を學んだ。當時すでに有名であつたかれの師慧龍は、もつぱら『法華經』の根本教義を説くことに努めていた。⁽³³⁾ その後、僧印は宋の都建康へ行つて、中興寺に止まつた。そこでかれは『涅槃經』やその他の佛典の研究に従事した。宋の大明年間（四五七―四六四）に僧印は大集會に招かれて法匠となつた。そのときの聽講者は七百人以上に及んだという。また僧印は司徒文宣王や東海の徐孝嗣の招きによつてしばしば佛典の講説をおこなつた。かれは多數の佛典を研究したけれども、とくに『法

華經』の研究によつて著名であつた。かれはその生涯を通じて『法華經』の講説を實に二百五十二回おこなつたと傳えられている。この講説の回数によつて、かれが『法華經』の思想にいかにか傾倒していたかということがよくわかる。かれは齊の永元元年（四九九）に六十五歳で歿した。

ところで、僧印が廬山の慧龍について『法華經』を學んだといふのはいつごろのことであつたのであろうか。かれは宋の大明年間（四五七—四六四）にはすでに首都建康へ出て、佛典の講説に従事していたから、かれが廬山において慧龍について『法華經』を學んだのは宋の大明元年、すなわち西曆四五七年以前のことであつた。かれは西曆四九九年に六十五歳で歿したから、西曆四五七年にはかれはちようど二十二歳であつた。そうして、かれはこのときにはすでに建康へ出ていたから、かれが廬山において實際に『法華經』を學んだのは、これよりももう少し前、すなわちかれが二十歳前後のところであつたと考えられる。

また僧印が首都建康において『法華經』の講説に従事したのは、少なくとも西曆四五七年からかれが亡くなつた西曆四九九年にいたるまでの約四十二年間であつたと考えられる。

また齊の首都建康において『法華經』の研究講説をおこなつた人としては、慧約が傳えられている。慧約は、俗姓を婁といい、東陽烏場（浙江省金華縣）の人で、七歳で『孝經』や『論語』などを讀んだ。かれは十二歳になつて初めて剡（浙江省嵊縣）に遊び、あまねく塔廟を巡拜して、多數の佛典の奥義を究めたので、當時の人びとから「少くして妙理に達した婁居士」と呼ばれていた。かれは宋の泰始四年（四六八）十七歳のときに上虞（浙江省上虞縣）の東山寺において出家し、南林寺の沙門慧靜に師事した。かれはまた師慧靜について剡の梵居寺において佛道の修行に勵んだ。

齊の太宰文簡公椿淵や太尉文憲公王儉は、ともに熱烈な佛教信者であつて、佛教の宣布に努めた人であるが、これらの希望によつて諸大乘經典が講説されたときには、やはり『維摩』『大品』『勝鬘』などの諸大乘經典とともに『法華經』が選ばれて講説された。⁽³⁵⁾ ここには齊の都建業を中心として一般の知識階級によつて『法華經』がひじうに尊重されて、よく研究され講説されていた事實の一端がうかがわれる。

六

齊・梁の首都建康において『法華經』の研究講説に關係のあつた人物としては、寶亮、法雲、智藏が擧げられる。まず、寶亮は、俗姓を徐氏といい、その先祖は東莞（山東省莒縣）の貴族で、晉が敗れたときには東萊の愷縣（山東省黃縣）に避難した。かれは十二歳で出家して、當時名聲の高かつた青州（山東省益都縣）の道明法師に師事して、二十一歳のときに宋の都建康へ出て中興寺に止まつた。かれは人びとから尊敬され、ことに熱心な佛教信者であつた齊の竟陵文宣王はみずからかれのところへ行つて、教えを請うてかれを接足恭禮したとさえ傳えられている。

その後、寶亮は鍾山の靈味寺に移つて、⁽³⁶⁾『涅槃』『勝鬘』『維摩』『十地』など多數の佛典を講説したのであるが、そこでは『法華經』は十回近く講説されたという。かれには三千人以上の弟子があり、常に師事する弟子は數百人に及んだという。かれは梁の天監八年（五〇九）に靈味寺において六十六歳で歿した。

ところで、寶亮が鍾山の靈味寺において『法華經』を講説したのは、いつごろのことであつたのであろうか。寶亮が靈味寺に入つて佛典を講説したのは、齊の竟陵文宣王に會つたのちのことであるから、それは齊代のことになる。かれがかりに齊の永明八年（四九〇）に靈味寺に入つたとするならば、かれが靈味寺で歿したのは梁の天監八年

(五〇九)であつたから、かれは靈味寺に約二十年間住していたことになる。したがつて、寶亮はこの二十年間のうちのいずれかの時期に靈味寺において『法華經』を講説したと考へて大過ないであらう。

法雲は、俗姓を周氏といい、義興陽羨(江蘇省宜興縣)の人で、七歳で出家して師とともに建康の莊嚴寺に住し、僧成、玄趣、寶亮の弟子となつた。かれは十三歳になつて初めて佛教を學んだが、太昌寺の僧宗や莊嚴寺の僧達はともにかれを褒め稱えたという。またかれが三十歳になつて、齊の建武四年(四九七)の夏、初めて妙音寺において『法華經』と『淨名經』を講説したときには、聽講者は堂に滿ち溢れたと傳えられている。⁽³⁷⁾

當時、齊の都建康では『維摩經』とともに『法華經』の研究講説がひじように盛んであつたが、ただこゝで注意すべきことは、法雲が初めて佛典を講説したときに、多數の諸大乘經典のなかからとくに『法華經』を選んで、それを講説したということである。これは、とりもなおさず、法雲が諸大乘經典のなかでも、とくに『法華經』の思想に傾倒して、その講説を聞く人びともまたその思想に大きな關心を示していたという事實を物語つてゐるにほかならない。

その後、法雲は梁の武帝に招かれて華林殿において『法華經』を講説した。⁽³⁸⁾かれは梁の大通三年(五二九)に六十三歳で歿したが、かれは齊の建武四年(四九七)に初めて『法華經』を講説してから、かれが亡くなるまでの約三十年間に首都建康においてたびたびこの經典を講説したと考へられる。それは、かれが『法華經』を研究講説した結果としてこの經典の註釋書を著わした⁽³⁹⁾という事實によつても明らかである。

智藏は、俗姓を顧氏といい、吳郡吳(江蘇省吳縣)の人で、十六歳のときに宋の明帝に代わつて出家した。かれは宋の泰始六年(四七〇)に勅命によつて建康の興皇寺に住し、上定林寺の僧遠や僧祐に師事し、また天安寺の弘宗に

も師事した。さらに當時すでに天下に名聲を博していた僧柔と慧次の二師について佛教を學んで、それに精通したと傳えられている。齊の文憲王公は智藏を安居に招いて、かれと早く知り合わなかつたことを歎いたといわれる。太宰文宣王は大いに佛教を興隆し、佛典を講説するために、學解の僧を二十人ほど招集したが、そのときに智藏はそのなかに選ばれた。かれは年臘が最少のために末坐に坐つていたけれども、佛教の意義をよく理解していた點ではかれの右に出る者はいなかつた。齊の永元二年（五〇〇）に、智藏は會稽へ行つて、法華山に住して、そこで佛典の講説に努めたが、やがて梁代になつて首都建康を中心として佛教が盛んになると、かれもそこへ出て佛教の弘通に盡力した。かれは『大品』『小品』『涅槃』『般若』『十地』『金光明』『成實』『百論』『阿毘曇心』などの諸經論とともに『法華經』の研究講説をおこなつて、それぞれの註釋書を著わした。そうしてこれらの註釋書はすべて世におこなわれたとい⁴⁰う。かれは梁の普通三年（五二二）九月十日に開善寺において六十五歳で歿した。

ところで、智藏による『法華經』の研究講説は、主としてどこでなされたと考えるべきであろうか。かれはその生涯の大部分を首都建康で過ごしているから、かれによるこの經典の研究講説は、主としてそこでなされたと考えなければならぬ。ただかれは齊の永元二年（五〇〇）以前に一度と永元二年に一度と計二度ほど會稽へ行つて、そこで佛典の研究講説に従事していたから、かれがそこで『法華經』の研究講説をおこなつて、人びとの思想信仰を育んだことは疑いない。

またこの時代に北シナの洛陽地方において『法華經』の研究講説に従事した人としては、曇淮と法上が傳えられている。曇淮は、俗姓を弘といい、魏郡湯陰（河南省臨漳縣）の人で、はじめ昌樂王寺に住し、出家して智誕法師に師事して、佛教を學んだ。かれは諸大乘經典のうちでもとくに『涅槃經』と『法華經』を善くし、洛陽地方におい

て有名であつた。⁽⁴⁾その後、齊の竟陵王は大いに佛教を保護し信奉して、盛んに講席を設けたが、それを聞いた曇准は揚子江を渡つて南へ行つて湘宮寺に止まつた。かれは齊の臨川王蕭映や長沙王蕭晃によつてひじように重んじられ、また廬江の何默や彭城の劉繪の歸依を受けた。かれは梁の天監十四年(五一五)に七十七歳で歿した。

ところで、曇准が洛陽地方において『法華經』を研究講説したのはいつごろであつたのであろうか。かれは齊代にはすでに揚子江を渡つて首都建康へ行つていたと考えられるから、かれが洛陽地方においてこの經典を研究講説したのは、少なくとも齊代になる西暦四七九年以前であつたことになる。ともかく、これによつてこの時代に北シナの洛陽地方において『法華經』の研究講説がおこなわれていたことが明らかである。

法上は、俗姓を劉氏といい、朝歌(河南省淇縣)の人で、九歳で『涅槃經』を讀誦して出家の志をおこし、十二歳のときに道藥禪師について出家した。かれははじめ相州(河南省臨漳縣)へ行き、ついで汲郷へ歸り、また北魏の都洛陽へ出て佛教の研究に努めた。のち、かれは林慮(河南省林縣)の胡山寺において『維摩經』や『法華經』を讀誦して、また洛陽へ行つて佛典の講説を聞き、學歲に及んで初めて『法華經』を講説した。⁽⁴²⁾かれは年四十にして懷衛に遊化し、魏の大將軍高澄の奏によつて鄴都に入り、統師となつて僧録を掌つた。

北齊の天保二年(五五一)に、法上は文宣帝の歸依をうけ、國內に十統が置かれると、昭玄大統に任命され、國師として篤く禮遇された。かれは勅命によつて戒師となり、帝および后妃重臣らに菩薩戒を授けた。天保七年(五五六)に、かれは鄴都の天平寺に入つて、インド僧那連提黎耶舍の佛典の翻譯を監掌した。かれはのちに勅命によつて相州の定國寺に住し、ついで鄴都の西山に合水寺を建てて、そこに住し、山上に彌勒堂を造つて、そこで兜率に生まれかわることを願つたといわれる。かれは北周の大象二年(五八〇)七月十八日に合水寺において『維摩經』や

『勝鬘經』を讀誦し終わつて、八十六歳で歿した。

ところで、法上が洛陽において『法華經』を講説したのはいつごろのことであつたのであろうか。それは、かれが慧光法師について具足戒を受ける以前のことであつたと考えられる。かれは北周の大象二年（五八〇）に八十六歳で歿したと伝えられているから、かれが具足戒を受けたと考えられる二十歳のときはちようど西曆五一五年に相當する。したがつて、かれが洛陽において『法華經』の講説に従事したのは、少なくとも西曆五一五年以前のことであつたと考えられる。そうすると、かれは十八、九歳でこの經典を講説したことになるが、これは事實として認めても差し支えないであらう。もつとも、かれが北魏が分裂した西曆五三四年まで首都洛陽に滞在して、佛教の弘通に努めていたとするならば、かれがそのころまでそこで諸大乘經典とともに『法華經』の研究講説に従事していたと考えてもなんら差し支えないわけである。

七

宋・齊・梁の首都建康において『法華經』の研究講説をおこなつた人としては、法通と法令が伝えられている。法通は、俗姓を褚氏といい、河南陽翟（河南省禹縣）の人である。かれは十一歳のときに出家して、もつぱら諸大乘經典の研鑽に努めたが、その諸大乘經典のうちでも、とくに『法華經』と『大品般若經』を最も重要視して、その研究に力を盡くした。⁽⁴³⁾かれは三十歳に滿たないうちに講師となり、かれの講席には學徒が雲聚したと伝えられている。その後、法通は首都建康へ出て、はじめて莊嚴寺に止まり、のちに上定林寺に住した。かれは齊の竟陵文宣王や丞相文獻王によつてひじように尊敬された。かれは陳郡の謝舉、吳國の陸果、潯陽の張孝秀らに戒を授け、かれ

の僧俗の弟子は七千人以上に及んだといわれる。かれは首都建康の東北に位する鍾山において三十數年間を過ごし、梁の天監十一年（五二二）九月二十一日に七十歳で歿した。⁽⁴⁴⁾

法通は、若いころとくに『法華經』に強い關心をもつて、それを研究したと伝えられているから、かれは、かれが亡くなるまでの三十數年間を過ごした鍾山においてしばしばこの『法華經』の講説をおこなつたことは疑いない。法令は、俗姓を董氏といい、その出身地は不明であるが、少くして出家して、鍾山の上定林寺に住した。かれはここでもつばら佛典の研究に従事して、『涅槃』『大品』『小品』などの諸大乘經典を善くし、なかでも『法華經』と『阿毘曇心論』には最もよく精通したといわれる。かれは梁の天監五年（五〇六）に六十九歳で歿した。⁽⁴⁵⁾

法令は、天監五年に亡くなるまで三十三年間鍾山を出なかつた⁽⁴⁶⁾と伝えられているから、かれによる『法華經』の研究講説は、主としてこの三十三年間に鍾山においてなされたと考えられる。それはちょうど西曆四七三年から五〇六年にかけての期間であつた。

梁・陳の首都建康において『法華經』の研究講説に従事した人としては、寶瓊と慧勇が挙げられる。寶瓊は、俗姓を徐氏といい、もともと東莞（山東省莒縣）の人で、のち戦亂を避けて、毘陵の曲阿縣（江蘇省丹陽縣）に移住した。かれは絳年にして沙門法通に師事し、十五歳を過ぎたころに光宅寺の法雲について教えを受けようと思つたこともあつた。二十歳のころになると、かれはよく佛典を講説して、熱烈な佛教信者であつた梁の武帝に招かれて、壽光殿に入つて佛典を講説したが、のち故郷の建安寺へ歸つた。そのうち寶瓊は、ふたたび招かれて梁の都建康に出て『成實』『涅槃』『維摩』などの諸經論とともに『法華經』の研究講説をおこなつた。⁽⁴⁷⁾

このように寶瓊は、佛典の研究講説をおこなつて、多數の註釋書を著わしたが、そのなかに『法華經』の註釋書

があつた。ところで、この註釋書はいつごろどこで著わされたのであろうか。寶瓊はその生涯の大部分を首都建康で過ごしているの、かれが『法華經』の註釋書をそこで著わしたことはまず間違いないと思われる。時代はかれが五十四歳のときに梁代から陳代にかわつてゐるが、かれによる『法華經』の註釋はかれが五十四歳のとき、すなわち梁代までになされたと考えられる。そうしてかれは八十一歳の高齡で亡くなつてゐるから、陳代には二十七年間生存していたことになる。ともかく、かれは梁代においてすでに『法華經』の研究を完成してその註釋書を著わして、五十四歳以後、すなわち陳代に入つてからは首都建康において他の諸大乘經典とともに『法華經』の講説をおこなつて、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

慧勇は、俗姓を桓氏といい、先祖は譙國龍亢（安徽省懷遠縣）の人で、のち吳郡吳縣（江蘇省吳縣）の東郷栢里に寓居した。慧勇ははじめ首都建康へ出て、靈曜寺の則法師に依止したが、二十歳のときに靜衆寺の峰律師について『十誦律』を學んだ。當時、龍光寺の僧綽と建元寺の法寵とともに建康佛教界に名を成してゐたが、慧勇はかれらについて『成實論』の研鑽に努めた。かれは三十歳になると盛んに佛典の講説をおこなつたが、その講席には遠くから學徒が集まつて來たという。

陳の天嘉五年（五六四）に、慧勇は文帝に招かれて太極殿において佛典の講説をおこなつた。この講説には多數の人びとが集まり、このとき以來、かれはひじょうに有名になつたといわれる。かれは大禪衆寺に十八年間住して、もつぱら佛教の弘布に努めたが、陳の至德元年（五八三）五月二十八日に六十九歳で歿した。

慧勇は、首都建康の佛教界において諸大乘經論とともに『法華經』を講説したと傳⁽⁴⁸⁾えられてゐるが、かれはこの經典をいつごろ講説したと考えるべきであらうか。かれは三十歳になると盛んに佛典の講説をおこなつた⁽⁴⁹⁾と傳えられ

ている。そうしてかれが三十歳のときはちょうど梁の大同十年、すなわち西暦五四四年に相當するから、かれが諸大乘經論とともに『法華經』を講説したのはこれ以後のことである。したがって、かれが首都建康においてこの經典を講説したのは、少なくとも西暦五四四年から、かれが亡くなつた西暦五八三年にいたるまでの約三十九年間のいずれかの時期においてであつたと考えられる。ともかく、かれがこの三十九年間に首都建康において『法華經』を講説して、人びとの思想信仰に大きな影響を與えたことは疑いない。

梁・陳の時代に潼州において『法華經』の研究講説に従事した人としては、寶象が傳えられている。寶象は、俗姓を趙氏といい、もともと安漢（四川省南充縣）の人で、のち綿州（四川省綿陽縣）昌隆の蘇溪に住した。かれは十六歳で梁の平西王に事えて、はじめ道士の童子となつて、まだ佛教を學んではいなかった。かれは二十四歳のときに出家して、具足戒をうけ、まず律典を聞き、ついで『成實論』を聞いた。こうして寶象は多數の佛典の研究講説に努めて、それぞれの註釋書を著わしたが、それらの註釋書は廣く世におこなわれたと傳えられている。その後、かれは『涅槃』などの諸大乘經典とともに『法華經』の註釋書を著わした。⁽³⁰⁾かれは北周の保定元年（五六一）十一月二十三日に潼州の光興寺において五十歳で歿した。

ところで、寶象は『法華經』の註釋書をいつごろどこで著わしたと考えるべきであらうか。かれはその生涯のほとんどすべてを潼州、すなわち四川省の綿陽縣で過ごしたから、かれがそこでこの經典の註釋をおこなつたことは間違いない。そうして、かれは二十四歳で出家したのであるから、かれがこの經典の註釋書を著わしたのはかれの二十四歳以後のことであると考えるなければならない。かれは西暦五六一年に五十歳で亡くなつたから、かれが二十四歳のときはちょうど西暦五三五年に相當する。したがって、かれが潼州において『法華經』の研究講説をおこな

つて、その註釋書を著わしたのは、少なくとも西曆五三五年から、かれが亡くなつた西曆五六一年にいたるまでの約二十五年間のいずれかの時期においてであつたと考えられる。

このようにこの時代に都から遠く離れた四川省の地において『法華經』の研究講説がおこなわれて、しかもその註釋書が著わされたということは注目すべきことである。

陳代の長城において『法華經』の研究講説をおこなつた人としては、慧弼が伝えられている。慧弼は、俗姓を蔣氏といい、常州義興（江蘇省宜興縣）の人で、陳の永定二年（五五八）に惠殿寺の領法師の弟子となつた。かれははじめ『成實論』を聞き、二十歳になると、江蘇省の揚州を中心とした地方で佛教の宣布に努めた。かれは天宮晃公について『雜心論』を學び、また『六足論』や『八健度論』などを究めた。陳の天嘉元年（五六〇）に、慧弼は各地の講席を遊歴して、太建十年（五七八）には勅命によつて長城（浙江省長興縣）の報德寺において『法華經』と『涅槃經』の講説をおこなつたが、そのときには僧俗の聽講者が堂に滿ちあふれたといふ⁽⁵¹⁾。その後、慧弼は首都建康に招かれて、そこで佛典の講説に従事したが、のち故郷の常州へ歸つて安國寺に住した。そうしてかれは隋の開皇十九年（五九九）正月に六十三歳で歿した。

このように慧弼は、陳の太建十年（五七八）に長城の報德寺において『法華經』を講説したことが明らかであるが、しかしこのとき以外にも、かれはかれが活躍した地域、すなわち首都建康やかれの故郷の常州一帯においてこの經典を講説して、この地域の人びとの思想信仰を育んだことは疑いないと思われる。ただかれが故郷へ歸つたのは陳が滅んだ西曆五八九年以後であつたから、かりにかれが晩年に故郷の安國寺でこの經典を講説したとしても、それは隋代のことになる。ちなみに、かれは西曆五九九年に亡くなつたから、隋代には十年間生存していたことになる。

八

以上に検討したように、『法華經』は、六朝時代においては、少なくとも文獻に現われる限りでは、陝西省のやや南部に位する長安、河南省の西北部に位する洛陽、山東省の北部に位する臨淄、江蘇省の西北部に位する彭城、同じく江蘇省の南西部に位する建康、浙江省の北端に位する吳興、吳興のやや西北に位する長城、同じく浙江省の北部に位する會稽、江西省の北端に位する廬山、湖北省の南部に位する荊州、および四川省の西北部に位する潼州において研究され講説されて、これらの地方の人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。またこの時代には多數の『法華經』の研究者が、建康に在住して、諸大乘經典とともにこの經典の研究講説に従事していたから、この經典は、この時代には少なくとも宋・齊・梁・陳の首都建康を中心とした地域において最もよく研究され講説されて、この地域一帯の人びとの思想信仰に測り知れない影響を与えたと考えられる。

1 僧叡の「法華經後序」は『出三藏記集』卷八(大正藏、五五卷、五七頁中下)に收められている。またこの「法華經後序」は「妙法蓮華經後序」と題して大正藏、九卷、六二頁中下に收められている。著大智論、十二門論、中論等諸序、并著大小品、法華、維摩、思益、自在王、禪經等序、皆傳於世(『高僧傳』卷六、僧叡傳、大正藏、五〇卷、三六四頁中)。

2 この經典の譯出の實情については、慧觀の「法華宗要序」に「秦弘始八年夏、於長安大寺、集四方義學沙門、二千餘人、更出斯經、與衆詳究、什自手執胡經、口譯秦語」(『出三藏記集』卷八、大正藏、五五卷、五七頁中)と記されている。またこの經典の譯出の年時については、僧叡の「法華經後序」(『出三藏記集』卷八、大正藏、五五卷、五七頁下)に「是歲弘始八年歲次鶡火」と述べられている。

3 宇井伯壽博士の年代算定に従えば、僧叡は西曆四〇一年に四十八歳であつたから、かれが亡くなつた六十七歳のときはちようど西曆四二〇年であつたことになる(宇井伯壽著『釋道安研究』四八頁)。

4 『正法華經』十卷、この經典は大正藏、九卷、六三頁上—一三四頁中に收められている。

5 能講正法華經、及光讚波若、每法輪一轉、輒道俗千數〔高僧傳〕卷六、曇影傳、大正藏、五〇卷、三六四頁上〕。

6 曇影が鳩摩羅什以前に諸大乘經典のうちでもとくに『法華經』を最も重要視していたということは、「影既舊所命宗」〔高僧傳〕卷六、曇影傳、大正藏、五〇卷、三六四頁上〕ということばによつて知られる。

7 什後、出妙法華經、影既舊所命宗、特加深思、乃著法華義疏、四卷、并注中論〔高僧傳〕卷六、曇影傳、大正藏、五〇卷、三六四頁上〕。また鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』七卷は大正藏、九卷、一頁下—一六二頁中に收められている。

8 關中沙門僧肇、始注維摩、世咸翫味、及生更發深旨、顯暢新異、講學之匠、咸共、憲章其所述、維摩、法華、泥洹、小品、諸經義疏、世皆寶焉〔出三藏記集〕卷十五、道生法師傳、大正藏、五五卷、一一一頁中〕。初關中僧肇、始注維摩、世咸翫味、生乃更發深旨、顯暢新異、及諸經義疏、世皆寶焉〔高僧傳〕卷七、竺道生傳、大正藏、五〇卷、三六七頁上〕。

9 融後還彭城、常講說相續、問道至者、千有餘人、依隨問徒、數盈三百……所著、法華、大品、金光明、十地、維摩等義疏、並行於世矣〔高僧傳〕卷六、道融傳、大正藏、五〇卷、三六三頁下〕。

10 字井伯壽著『釋道安研究』四八頁。

11 聞徐州、有僧藥者、雅明經論、挾策從之、研綜涅槃、法花、勝鬘〔續高僧傳〕卷六、道登傳、大正藏、五〇卷、四七一頁下〕。

12 道登、善涅槃、法華、並爲魏主、元宏所重、馳名魏國〔高僧傳〕卷八、僧淵傳、大正藏、五〇卷、三七五頁中〕。

13 年造知命、譽動魏都、北土宗之〔續高僧傳〕卷六、道登傳、大正藏、五〇卷、四七一頁下〕。

14 この「法華宗要序」は『出三藏記集』卷八、大正藏、五五卷、五七頁上中に收められている。

15 通著法華宗要序、以簡什〔高僧傳〕卷七、慧觀傳、大正藏、五〇卷、三六八頁中〕。

16 至年二十五、能講涅槃、法華、十住、淨名、雜心等〔高僧傳〕卷八、僧慧傳、大正藏、五〇卷、三七八頁中〕。

17 虬、精信釋氏、衣麤布衣、禮佛長齋、注法華經、自講佛義〔南齊書〕卷五十四、劉虬傳〕。虬、精信釋氏、衣麤布、禮佛長齋、注法華經、自講佛義〔南史〕卷五十、劉虬傳〕。

18 後立寺於臨淄、講法華、大小品、十地等、學徒雲聚、千里命駕〔高僧傳〕卷七、慧亮傳、大正藏、五〇卷、三七三頁中〕。

19 晚入吳虎丘寺、講禮、易、春秋、各七遍、法華、大品、維摩、各十五遍〔高僧傳〕卷七、曇諦傳、大正藏、五〇卷、三

七一頁上)。

- 20 釋法珍(瑤) 元嘉中過江、吳興沈演之、特深器重、請還吳興、武康小山寺、首尾十有九年、自非祈請法事、未嘗出門、居于武康、每歲開講、三吳學者、負笈盈衢、乃著涅槃、法華、大品、勝鬘等義疏(『高僧傳』卷七、法瑤傳、大正藏、五〇卷、三七四頁中下)。

- 21 大明六年、勅吳興郡、致禮上京、與道猷同、止新安寺(『高僧傳』卷七、法瑤傳、大正藏、五〇卷、三七四頁下)。

- 22 後有豫州、沙門道慈、善維摩、法華(『高僧傳』卷七、道猷傳、大正藏、五〇卷、三七四頁下)。

- 23 超進の傳記は『高僧傳』卷七(大正藏、五〇卷、三七四頁中)に收められている。それによると、かれは生存中は主として會稽を中心とした地域において活躍して、宋の元徽年間(四七三—四七七)に九十四歳で歿したことが知られる。

- 24 〔曇機〕至于稽邑、善法華、毘曇、時世宗奉、與進相次、郡守瑯琊王琨、請居、邑西嘉祥寺(『高僧傳』卷七、超進傳、大正藏、五〇卷、三七四頁中)。

- 25 鍾山の靈味寺は宋の永初三年(四二二)に法意によつて建立されたという説もある。

- 26 著聖智圓鑒論、無生論、法身論、業報論、及法華宗論等、皆傳於世(『高僧傳』卷七、僧含傳、大正藏、五〇卷、三七〇頁中)。

- 27 俄而於寺、開講法華、及十地、法席之日、軒蓋盈衢、觀闕往還、肩隨踵接(『高僧傳』卷三、求那跋摩傳、大正藏、五〇卷、三四一頁上)。

- 28 宋世祖、藉其風素、勅出京師、止定林下寺、頻建法聚、聽衆雲集、著法華、維摩、泥洹義疏、并毘曇玄論、區別義類、有條貫焉(『高僧傳』卷七、僧鏡傳、大正藏、五〇卷、三七三頁中下)。

- 29 後、遊學京師、備貫衆典、涅槃、法華、維摩、大品、並、探索微隱、思發言外(『高僧傳』卷八、曇度傳、大正藏、五〇卷、三七五頁中)。

- 30 於是、四五年中、遊歷講肆、備訪衆師、善小品、法華、思益、維摩、金剛波若、勝鬘等經、皆思探玄頤、鑒劬幽疑、提章比句、麗溢終古(『高僧傳』卷八、慧基傳、大正藏、五〇卷、三七九頁上)。

- 31 司徒文宣王、欽風慕德、致書慰勸、訪以法華宗旨、基乃、著法華義疏、凡有三卷、及製、門訓義序、三十三科、并略申、方便旨趣、會通、空有二言、及、注遺教等、並行於世(『高僧傳』卷八、慧基傳、大正藏、五〇卷、三七九頁中)。

- 32 每講法華、十地、聽者盈堂(『高僧傳』卷八、弘充傳、大正藏、五〇卷、三七六頁上)。
- 33 從慧龍、諮受法華、龍亦當世著名、播於法華宗旨(『高僧傳』卷八、僧印傳、大正藏、五〇卷、三八〇頁中)。
- 34 雖學涉衆典、而偏、以法華著名、講法華、凡二百五十二遍(『高僧傳』卷八、僧印傳、大正藏、五〇卷、三八〇頁中)。
- 35 齊太宰文簡公褚淵、大尉文憲公王儉、佐命一期、功高百代、欽風味道、共弘法教、淵嘗講、淨名、勝鬘、儉亦請、開法、花、大品(『續高僧傳』卷六、慧約傳、大正藏、五〇卷、四六九頁上)。
- 36 後移、憩靈味寺、於是、續講衆經、盛于京邑、講大涅槃、凡八十四遍、成實論十四遍、勝鬘四十二遍、維摩二十遍、其大小品十遍、法華、十地、優婆塞戒、無量壽、首楞嚴、遺教、彌勒下生等、皆近十遍(『高僧傳』卷八、寶亮傳、大正藏、五〇卷、三八一頁下)。
- 37 及年登三十、建武四年夏、初於妙音寺、開法華、淨名二經、序正條源、群分名類、學徒海濫、四衆盈堂(『續高僧傳』卷五、法雲傳、大正藏、五〇卷、四六四頁上)。
- 38 後、法雲、於華林寺(殿)、講法華(『高僧傳』卷十、保誌傳、大正藏、五〇卷、三九四頁下)。
- 39 法雲撰『法華義記』八卷、この註釋書は大正藏、三三卷、五七二頁下一六七九頁下に收められている。
- 40 凡講大、小品、涅槃、般若、法華、十地、金光明、成實、百論、阿毘曇心等、各著義疏、行世(『續高僧傳』卷五、智藏傳、大正藏、五〇卷、四六七頁中)。
- 41 善涅槃、法華、聞諸伊洛(『續高僧傳』卷六、曇淮傳、大正藏、五〇卷、四七二頁上)。
- 42 後潛林慮、上胡山寺、誦維摩、法花、纔浹二旬、兩部俱度、因誦求解、還入洛陽、博洞清玄、名聞伊洛、年暨學歲、創講法花(『續高僧傳』卷八、大正藏、五〇卷、四八五頁上)。
- 43 年十一出家、遊學三藏、專精方等、大品、法華、尤所研審(『高僧傳』卷八、法通傳、大正藏、五〇卷、三八二頁上)。
- 44 晦迹鍾阜、三十餘載、坐禪誦念、禮懺精苦(『高僧傳』卷八、法通傳、大正藏、五〇卷、三八二頁中)。
- 45 善涅槃、大、小品、尤精、法華、阿毘曇心(『續高僧傳』卷五、法令傳、大正藏、五〇卷、四六五頁中)。
- 46 足不下山、三十三載、草屣不食(『續高僧傳』卷五、法令傳、大正藏、五〇卷、四六五頁下)。
- 47 法花、維摩等經、並著文疏、故不備載、布在州邑(『續高僧傳』卷七、寶瓊傳、大正藏、五〇卷、四七九頁下)。
- 48 自始至終、講花嚴、方等大集、大品、各二十遍、智論、中、百、十二門論、各三十五遍、餘有法花、思益等數部、不記

- 49 『續高僧傳』卷七、慧勇傳、大正藏、五〇卷、四七八頁中下。
至年三十、法輪便轉、自此、遠致學徒、盛開講肆、高視上京、鬱爲翹采（『續高僧傳』卷七、慧勇傳、大正藏、五〇卷、四七八頁中）。
- 50 後制涅槃、法花等疏（『續高僧傳』卷八、寶象傳、大正藏、五〇卷、四八七頁上）。
- 51 太建十年、下勅、長城報德寺、講涅槃、法華、瓶錫盈堂、簪裾滿席（『續高僧傳』卷九、慧弼傳、大正藏、五〇卷、四九五頁上）。